



平岡昭利編、海青社、2008年11月15日発行、3048円＋税、B5判、333頁

教材としてまた眺めていても楽しい、興味深い本が刊行された。

本書には、県庁所在地とそれに次ぐ都市と代表的な工業・学術・住宅地化などにより地域の変貌著しい興味深い地域111ヶ所が選ばれている。B5判という限られた紙面ではあるが、広域表現に都合の良い5万分1地形図を中心に、必要に応じ1万分1、2万分1、2万5千分1、輯製20万分1図などを、適宜縮小を交えて配している。地形図を使った地誌には、数点の地図を重ね、地図上で変化を追う方法と、地誌の記述内容を地図を添えることで空間の変化を視覚的に補完する方法がある。前者の方法では多くの地図と膨大な頁数が必要となる。本書は後者の方法でまとめている。本書では、1地域は地図、解説共見開き2頁を中心に、6頁、8

頁を割いている地域も若干ある。

本書に先行して編者平岡昭利教授が野間晴雄教授と編集した古今書院の「地図で読む百年」（以下先書）がある。本書の地域毎の解説者は先書と重複する方々もあるが、新たに加わった方々を含め総勢86人にのぼる。

本書の内容は、地方ごとにまとめられ、地方の中では行政的な順序ではなく、地方の中心的な都市から主要都市、話題の地域へと展開している。例えば東北地方では、仙台、盛岡、青森…と並ぶ。また先書では、取り上げられなかった和歌山などが加えられ、苫小牧、室蘭、標茶、八郎潟、いわき（小名浜）、多摩二ユータウン、相模原、横須賀、つくば、鹿島臨海工業地域、豊田、軽井沢、黒部川扇状地、大和川、千里丘陵、天理、四日市、児島湾干拓地、水島工業地帯、鳴門、有明海、桜島など都市化、工業地化、自然・社会環境の変化を時系列的に示している。また、離島では三宅島、南大東島など日頃見過ごしそうな場所も取り上げられて興味深い。なお、4頁の旧版のものとして挙げられている明治33年式地形図図式の記号は、大正6年式のものである。

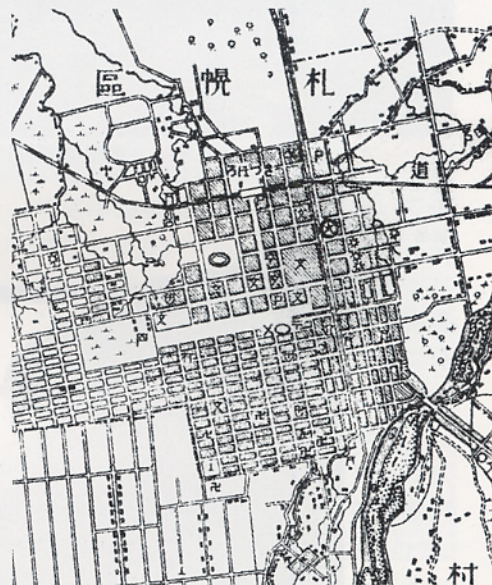
日本地誌のテキストとして、地理専攻の者のみならず、教職課程での教材としても、地域と地図との結びつきを学ばせる絶好の教材であることに間違

いなかろう。

（清水靖夫）



1945（昭和20）年の名古屋市、1：50000「名古屋北部」「名古屋南部」昭和20年部分修正



1896（明治29）年の札幌、1：50000「札幌」、明治29年製版